

8 備前焼との比較

8-1 備前焼と登り窯 —やきものの“元気”を考える—

岡下慶彦

I 備前焼は元気

1枚の新聞記事がある。

「備前焼“元気”です」(注1)と大きな文字で、読み手にインパクトを与える。2001年5月10日の毎日新聞の記事だ。バブル景気崩壊後、消費者の買い控えが進み、全国的にやきもの産業が低迷・じり貧・廃業の傾向にある。だが備前焼はそうではない、廃業や倒産とは無縁な「元気なやきもの」だという内容のものであった。

そもそもやきものが元気であるとは、いったいどういうことだろうか。単に作品の売上だけで考えれば、備前焼であろうが京焼であろうがバブル期以降は減少傾向にあることは同じである。先に挙げた記事では「廃業する作家や窯元が出ない」ことを元気であることの象徴とし、その要因を他産地との販売形態の違い、すなわち流通問屋に頼った大量販売でなく、対面販売を重視するやり方が功を奏しているという備前焼陶友会の見解が示されていた。確かに景気低迷のなか、伝統工芸に従事する人の数が増えつづけるというのは驚異的なことであると言える。ただ、作家が集まり長期に渡って繁栄が続くには、その場所に、その工芸に強い魅力が必ずあるはずである。それは流通システムに限った話ではないだろう。備前焼といえば、登り窯で焼かれた無釉焼締作品の素朴な味わいが全国の愛好者を惹きつけている。毎年開かれる「備前焼まつり」では10数万人の来客があると言われる。しかし登り窯を使うこと故の問題も多くあるだろうし、売上が落ちていっていることを無視するわけにもいかない。京都においては登り窯を使うことで発生する「煙」が、登り窯を使えなくしたという皮肉な結果になっている。備前が同じような運命を歩まないと言えようか。否、その足音は既に聞こえている。まだまだ少ないとはいえ、備前焼の中心地である伊部においても「煙」に対する反発の声は存在する。備前市内における新しい窯の設置には規制がある。内容としては「半径200メートル以内の全ての住人の同意」など厳しいものが多く、新しく窯を作ろうと思っても実際には不可能に近いのが現状であり、市外で築窯するケースが増えてきている。

「築窯における規制」

環境保険課 条例 設置届が必要

行政指導 同意書が必要

① 隣接土地所有者の同意

② 半径200m以内の全ての住民の同意

③ その地区の区長の同意

都市整備課 建築 都市計画法上、用途地域内では工業地域か準工業地域にしか窯が築かれない。(注2)

それでも「備前焼は元気」といえるだろうか。作家たちは備前焼の今に何を感じているのか。京都・五条坂では登り窯が使えなくなって、何人かの手によって保存運動が行われている。それは作家にとって登り窯が遺産である以上に、生活を共にした「命」と同等のもの

考えているからだろう。私は備前焼の元気さの象徴は「登り窯」にあると考えている。登り窯から煙がモクモクと立ち昇っているその風景こそが、伊部の町の魅力であり、愛好者を生んでいるのではないか。私は備前の作家にとっての登り窯を考えていくことで、京都の保存運動の意義を見つめ直していこうと思う。そして「やきものが元気」とはどういうことか、自分なりの結論を出したい。

II 備前焼と登り窯

1) 伊部の町と登り窯

ときに伊部焼と呼ばれることから分かるように、備前焼の中心地は伊部である。

もともと伊部に多くの窯が築かれたのは、やきものに適した良質の土が採取できることと、登り窯を焚く際に使われる大量の薪を確保できる地であったというのが大きな理由である。昭和40年代以降から事業所や窯が多く創業され、窯元や個人作家が増えてくると観光地としての意味合いが強くなり、「焼物の町」として伊部は発展を続けてきた。毎年秋に2日間に渡って行われる「備前焼まつり」では10数万人の観光客が訪れ、歩行者天国になった町を練り歩く。2005年には23回目を迎え、初日は雨のなかにも関わらず約12万人の来場があったと報道された。これだけの大きなイベントとなると地域住民の理解が必須である。特に、多くの観光客が訪れることで日常生活への影響が大きいし、実際に運営に参加してくれるボランティアも必要だ。作家と市民の相互理解は備前焼産業において無視することが出来ない。

登り窯を作り、それを焚くにも地域住民の理解があってこそである。松割木を使い、やきものを登り窯で焼く以上は、日常生活と煙が切っても切れない関係になる。その煙を受け入れてもらえなければ、登り窯が成り立たない。「登り窯で焼かれている」ことが備前焼の大きな魅力であろうが、もし住民の反発が強くなり登り窯を使えなくなっていった場合、備前焼はどうなってしまうのだろうか。備前には土がある。その土の色・味に大きな魅力ある。しかし、それを強く引き出すのは登り窯である。作家の人々は登り窯にどんな思いを抱いているだろうか。また伊部の町と、住民とどう関わっていこうと感じているのか。こういった疑問に生の声で答えていただくために、窯元に対するアンケート、そしてヒアリングを実施することにした。

2) 備前焼窯元へのアンケート

備前焼に従事しており、備前焼最大の組合である「備前焼陶友会」に所属している窯元の中から22の窯元（事業所）を選び、代表者にアンケートを送付した。後日、直接訪問し回収、および回収が困難な場所の場合は返送していただく形で調査を行った。22の窯元のうち伊部の窯元は14、伊部外の窯元は8である。そのうち回答を得ることができたのは17（伊部11、伊部外6）であった。本アンケートの目的は、備前焼製造に従事している方々の意見を聞くことで、備前焼の現状と未来への思いを汲み取ることにあった。詳しい内容と集計結果については後に上げた8-3を参照していただきたい。

窯元と地域住民との相互理解について、「陶芸の町としての備前、そして備前焼の将来」をたずねた項の問1、問2は注目すべき意見が寄せられた。「地域住民と相互理解が進んでいる」という答えと「不安がある」という答えが半々に分かれている。問2でその理由・内容について聞いているが、ほとんどが「煙害」に関することである。近隣住民との認識の差

がなかなか埋まらないことが不安感に繋がっている。問4では実際に「煙害」についてどう考えておられるのか質問したところ、回答者17のうち12名が「地域住民の理解が得られれば何とかなる」を選択していることから分かる通り、認識を擦り合わせることで登り窯を続けていく上での前提なのである。

「貴方ご自身のことやお店について」たずねた項では、問4では登り窯を焚く回数について、問5では1度の窯焚きでかかる日数を聞いた。問4ではもちろん「0回」という回答はなく、「1回～3回」が10名と多い。最大で「10回」という回答があった。問5においては短くて5日というものがあつたが、平均して「10日～14日」がほとんどである。たくさんの窯元が10～14日間に渡って数回の窯焚きを行うとなれば、窯入れ時期のずれを考えると常に町のどこかで煙が上がっている状態である。

「煙」に関わって「陶芸の町としての備前、そして備前焼の将来について」たずねた項では、問1・問2・問4にいくつか興味深いコメントが寄せられている。「煙は必要である」「煙が出ないと備前焼でなくなる」などの煙を必要とする意見や、「公害に対する一般の見方が画一的である、マスメディアの問題」などの一般の認識が不十分であるとする意見があつた。両者ともに「煙」あつてこそその備前焼であることを強く主張しているように感じられる。つまりは備前焼にとって登り窯の必要性が強いということであろう。問6では煙害以外の問題について質問した。複数回答可の質問であつたが「町に活気がない」と「売上げが伸びない」に回答が集中した。町に活気がないというのは、結局のところ現実問題として、備前焼まつり以外の期間において観光客が訪れることが望めなくなつてしまつてしまつたことだ。それは町そのものの魅力が薄いことと同義と言える。そして町に活気がないことと、売上げが落ちてきていることは因果関係にあるだろう。全体的にPR不足と感じている窯元が多い。PRに関して既に行つていること、今後やつてみたいことを同項の問9、問11でたずねたところ、多かつたのは「陶芸教室・指導」「インターネットを利用した販売」「旅行会社との提携」などであつた。特に旅行会社との提携は「やつてみたいこと」として挙げる窯元が多かつた。「やきものの町」の伊部は、観光地としてはまだまだ不十分だと認識されていることがわかる。

問題を多く抱えている備前焼ではあるが、それでも未だに登り窯は動いているし、多くの人々が産業を支えている。作家の方々は備前焼のどのような所に魅力を感じておられるのか。「貴方ご自身のことやお店について」質問した項の問8で、備前で作陶する理由について質問した。選択肢に「後継者だから」という理由は入っていない。伊部の窯元さんは世襲制で親から子へと代々受け継いでいるところが多い。だから彼らが伊部でやきものをやるのは自然なことだ。しかし、好きでもないものをやるのは不自然なので、この質問は意義があると言える。回答は「備前焼そのものに魅力を感じたため」に集中した。

では、その「備前焼そのものの良さ」とは何か。これを「陶芸の町としての備前、そして備前焼の将来について」質問した項の問12において記述形式で自由に書いて頂いた。多く寄せられたのは「手造り感」「無釉の素朴な味わい」「土の力」「登り窯を使うことでの自然の味」といったところであつた。良質の土を作家の手によって形づくり、釉薬を使わない、そして薪は松割木を使って登り窯で焼く。これらの行程の全てが一体となつて備前焼の「手造り感」が生まれる。そこに魅力を感じる人が多いのであろう。

備前焼そのものは今後どのように変化していくのだろうか。「陶芸の町としての備前、そ

して備前焼の将来について」質問した問8でこれからの備前焼についての考えを伺った。「伝統にこだわる必要がない」という回答は極めて少数で、多くは「伝統を踏まえる」ことが前提という回答であった。備前焼においては新しい流れが出てきているのも確かである。出来るだけ安価なものを大量に生産するといった時代の動きに合わせてやろうという発想、また他産地の土を混ぜるといったまったく新しい発想など様々あるが、備前焼の窯元たちは口を揃えて「それは本当の備前焼ではない」と言う。あくまでも1000年の歴史を誇る備前の伝統の技法を前提として、その味を活かしていくことが備前焼の本質であるとする考え方が一般的なようだ。そしてその技法を守る次代の作家たちは次々と生まれ活躍している。

「貴方ご自身のことやお店について」質問した項の問3で備前陶芸センターの修了者、入所者の有無について伺った。備前陶芸センターは岡山県工業技術センターの施設で、備前焼の基礎知識・技術を指導する、いわば作家志望の人にとっての研修所にあたる。ここの修了者で構成される備前育陶会も規模は大きい。問3の回答から、1つの窯元に1人以上修了者・入所者がいる場合が多いことが分かる。作家の育成機関として、十分に機能していると言えるだろう。

アンケート集計から伝わってくるのは、備前焼の魅力は土と登り窯であり、そして伝統の技法から生まれる手造り感であるということだ。その素朴な味を守っていかなければならないという窯元たちの声である。一方で登り窯の煙への地域住民の理解、そして販売不振への不安がある。煙への反発は登り窯の使用控えを生み、販売不振への不安は値引き競争、そして備前焼の価値低下を生む。電気窯でも備前焼は作れるが、本来の土の味を活かせない。備前焼の本来の魅力は登り窯を使うことによる「窯変」で、1点として同じ作品が作れないことにある。大量生産し安価で売ることによって販売不振を解消しても、そこに備前焼の魅力は、あの「暖かみ」は残っているだろうか。

3)伊部における窯元へのヒアリング調査

先のアンケートよりも更に踏み込んだ、生に近い声を聞くため、伊部において窯元3軒の窯元のご当主にご協力を頂き、ヒアリングを行うことができた。ヒアリングは3軒とも2005年11月21日に行ったが、固有名詞を出さないという条件でお話を伺ったため、以下では窯元A・B・Cとさせて頂く。

今の備前焼が抱えている様々な問題点についてお話を伺った。まずは煙害の話だが、「煙への苦情はバブルとかのブームのときが一番多かった。現在は少なくなってきたし、うちの隣はマンションが建っているけれども苦情がきたことはない。ただ場所によっては反対の強いところもあるみたいだね(窯元A)」「こればかりは地域の人たちに理解してもらえないのだけれど…強い反発のある地区は現在でもある。陶芸センターで(煙を抑える)研究はしているけども中々ね…(窯元B)」と、反発は部分的ながらも強いもので不安を感じるようだ。ただ「煙が出ないのならば備前焼ではなくなる。試験場で煙を抑えたりする研究なんかをやっているみたいだけど、松割木を使う以上は煙を防げない(窯元C)」「松割木でなければ出ない味がある、煙は受け入れてもらわなければ仕方がない(窯元A)」と、煙あってこそその備前焼であるという認識は窯元に共通する考え方であった。

窯元Aのご当主は「窯を作るのを規制するのなら、もっと早くにやるべきだったと思う。結局、ブームがあって人が増えてきて、だから当然煙の量が増えてきた。で、規制しようってなったと思うのだけれど、煙が増えてから規制したわけだから煙害の話は残ったまま。ただ

市内に窯を作れなくなったという話。これからは市外に窯を作る人が増えると思うけれど、ある場所で人が増えてきたらまた同じことが起こるんじゃないだろうか」と言う。確かに、市の窯設置規制では古くからある窯は許可を取る必要はないので、内部の窯元や作家の数は減らないし増えもしない。だから煙が多いままの規制には疑問が残るといえるのは理解できる。

他の問題についても聞いた。窯元Cのご当主は現代作家たちの技術の身につけ方に警鐘を鳴らす。「今の家の作家さんなんていうのは2～3年修行したら、すぐに窯を持ってしまうでしょう。あれは良くない。基礎ができないから見た目だけの作品になってしまう。見よう見まねで上手く作ろうとしても駄目。書道とかで達人の字を、ちょっとかじった人が見よう見まねでやっても、読めたものじゃないでしょう。それと一緒にですよ」。基礎が出来ていない以上は本当の備前焼を作れないと窯元Cのご当主は語る。窯元Cは作家養成所的な窯元で、多くの作家志望者がここで技術を学んで後に活躍している。その思いが先の言葉に表れているのだろう。「外国人の方も昔は結構勉強されていきましたよ、イギリスにイタリアに…イスラエルの人もいた。最後に彼らに卒業証を書いてあげるんです。それから向うで陶芸の指導する人もいれば、こっちに戻ってきて作家になる人もいる」と語る窯元Cのご当主は非常に楽しそうだった。

現在の問題点を踏まえながら伊部の将来について語っていただいた。「今の伊部では、観光客が来ても引き止めるだけの力がない。伊部で1日ないし半日を過ごせるような町並みを作るべき。もっとやきものの町らしく。とりあえず歩道と車道に備前焼のタイルを貼らないと…あれはこの辺の皆がやるべきだと、きっと思っていますよ。旅行会社のツアーなんかで観光客が来ると、美術館行って、どこかのお店に入って何か商品を買ってそれでおしまい。それでお客さんにどこか観光スポットはないですかって、よく聞かれるけどもこっちが困ってしまう。まあ窯の遺跡か、天津神社か、伊部を飛び出してもう閑谷学校に行ってもらおうか、そのくらい。自然の森を利用した、備前焼公園のようなものが必要だと思います(窯元A)」。窯元Aのご当主は伊部の町を、観光客や地域住民が備前焼を楽しみながら理解していけるような、しっかりとした町づくりを目指すべきだと考えている。

備前焼そのものの将来について、登り窯への思いを交えながら話をしていただいた。「登り窯が使えなければ、備前焼ではない。備前焼の良さは言うに言えない焼き具合の良さであり、それは今後も変わらないだろう。手造り感を大切に良いものを作ることが大切。(窯元B)」。「新しい窯は作れないし、古い窯は少しずつ減っていくだろう。備前焼は登り窯あってこそ、窯を絶やさないように生きていきたい。そしてそのためにも備前焼作家の後継ぎとなる者には、家の職業だからとか仕方なくとかではなく、積極的になってほしい。(窯元C)」。「登り窯が使えなくなれば、それは備前焼が終わる時。手造り感を大切にしていけばいい。備前焼は花を活ければ花が立つでしょう、ああいった脇役としての良さを守っていければ良いかなあと思う。私は備前にも清水焼団地のような、ああいったところが出来ればいいと思ってるんです。煙への反発があるなら窯の地区を作って集まればいい。話だけなら結構前からあるんだけどね(窯元A)」

備前の窯元にとって、登り窯は「無くなる」ということはあり得ない。登り窯が使えなくなれば備前で焼くことの魅力はほとんど失われてしまう。ヒアリングの中で強く感じたのは、登り窯の絶対性だった。

4) 備前と京都、それぞれの登り窯

備前と五条坂、登り窯を今も使っているところと、使えなくなって保存運動が起こっているところ。ここからくる登り窯への思いの違いはどの辺りにあるだろうか。五条坂ではもう登り窯を動かすことは出来ない。すなわち自分たちが生活のために働き、そしてそれを守ってきた「命」と同等とも言えるものが、もう使えない。使われなくなり放っておかれれば、ものは風化する。それが「命」であってもである。だから保存する。自分たちの生きてきた証を未来につなぐために保存する。

備前ではどうか。登り窯は彼らにとって「命」と言えるだろうか。私は今回の調査を通して「そうだ」と感じた。備前焼は「手造り感」が最も大切な要素だと窯元は口を揃える。そしてそれを出せるのは登り窯だけである。窯元Aは「登り窯が使えなくなれば、それは備前焼が終わる時」と話した。他の窯元さんも登り窯が備前焼の象徴と言う。今はまだ登り窯を好きなだけ使える。壊れたら修理するし、使えなくなれば壊して作り直したりもする。生活のためである。動いているものを保存することはないが、登り窯と彼らの生活は密接なものである。いま備前で活動しているという証だ。京都・五条坂もそうだったのではないか。登り窯を使っている時代は、登り窯を使うことに一生懸命なのだ。だからこそ使えなくなった現代で、自分たちの活動の証として未来へと伝えたいと思うのだろう。本質的には備前と五条坂、両者は一緒だと感じる。五条坂は巨大観光都市・京都において、公害対策の中で登り窯が受け入れられなかった。伊部は地方のやきものの観光地として、文化が町を支えている背景からそう簡単に規制を求められない。その違いが地域の理解の差に現れ、見かけ上の違いが両者の間には生まれている。しかし登り窯に対する作家の思いは変わらないだろう。備前はいま登り窯と共に生き、共に文化を創りだしている。五条坂は創りだした文化、生活の形を守り、未来に伝えようとしている。窯元Cの「窯を絶やさないように生きていきたい」という言葉に全てが込められているように思う。

Ⅲ 焼物の元気とは何だったのか

聞き取り調査を進めていく中で、備前焼の抱えるたくさんの問題点を聞き、備前焼の未来たるや暗闇に満ちているのではないかと思うことが多々あった。しかし、問題点を語る時の彼らの真面目で誠意ある発言と一生懸命なところを見て、聞いているうちに、ふと私を感じている不安感などはとても小さいもののように思えてきた。彼らは今、登り窯を使っている。煙を焚いて毎日登り窯と向き合っている。それこそが「元気」の象徴なのではないだろうか。確かに他産地に比べて売り上げは良いほう、個人販売というシステムも成功している。しかし本当の「元気」とはそういうところではないと思う。多くの問題点に囲まれながらも、必死に窯を焚く。いま作ることに出来る最も良い作品を生もうとする。そういった窯元さんが備前にはたくさんいた。そのエネルギーこそが備前焼の「元気」である、とそう考える。

京都はどうか、五条坂はどうか。五条坂をはじめ歩いて歩いた時、活気の無さに驚いて、そして意気消沈した覚えがある。しかし今の私は、五条坂は「元気」の火種が起こっている状態だと考え、期待の眼差しで見つめている。保存運動の是非を考える人々が増えてくればくるほど、五条坂の持つエネルギーは復活してくると思う。

真剣に文化に向き合うこと、これが「元気」であると私は結論づけたい。

最後になりましたが、この報告書を作成するにあたり以下の方々にお世話になりました。

ありがとうございました。(五十音順・敬称略)

一陽窯、一本松窯、鬼ヶ城窯、金重利陶苑、川口陶楽苑、木村興楽園、圭秀窯、小西陶古、五郎辺衛窯、山麓窯、柴岡陶泉堂、春湖苑、松園、泰山窯、陶吉、桃蹊堂、陶正園、陶伯窯、南燦窯、備州窯、備前一、備前永楽窯、備前陶苑、塚光窯

〔参考文献〕

(注 1) 『毎日新聞』(毎日新聞社、2001年5月10日)

(注 2) 『炎・JOY・備前 2002』(備前焼振興策策定委員会、2002) p 7